

“The Secret Sharer”における Leggatt の精神的価値  
——Conrad における現代の＜自我＞の問題, 分析ノート (1)——

溝 口 薫

## Summary

### The Moral Value of Leggatt in "The Secret Sharer": An Analytical Note on Conrad's Question of the Modern Self (1)

Kaoru MIZOGUCHI

The role of Leggatt as the protagonist's double in "The Secret Sharer" has been variously discussed by many critics, and not a few of them regard the fugitive as morally questionable, ascribing his role only to the psychological reflection of the protagonist's own "potential criminality" or "guilt". Such interpretation, either symbolical or not, however, does not serve well to explain why the protagonist-captain has no guilt feeling toward rescuing Leggatt from the legal pursuit, or why the captain, who seems to be in quest of his "ideal conception of personality", feels such strong self-identifying sympathy with the self-reliant young man throughout the story.

In this note, I will attempt to clarify the moral value Leggatt subtly embodies under the baffling appearance, considering him a part of the twin sharing and pursuing the same moral quality. I will concentrate on Leggatt's own story, as giving much attention to the contrast between him and the skipper and crew of the *Sephora*; for the contrast not only suggests a finer moral theme of the story, but gives us access to a larger question—Conrad's preoccupation with the problems of the modern self.

[ i ]

Joseph Conrad (1857-1924) の “The Secret Sharer, an Episode from the Coast ” (*Harper's Magazine*, 8-9 月号, 1910年発行, 後, 短編集 *Twixt Land and Sea Tales* (1912) に所収) は, その冒頭部に示されているように, 新任の青年船長が初めて指揮を取る船で体験した思いがけない人物との出会いと, その人物を救援することに伴う試練を通じて, 彼が「ひそかに期する理想的な在り方」 (“the ideal conception of one's own personality everyman sets up for himself secretly” (138))<sup>1)</sup> を全うし, 確たる自覚に目覚める成長物語ということが出来る。しかしながらその理想が一体何なのか, 語り手を兼ねる主人公は直接説明しようとせず, ただ彼が遭遇した一人の逃亡者 Leggatt に対して示す深い共感あるいは強い同一視のみがそのヒントとして強調されるばかりなのである。ところが語り手によって繰り返し “my double”, “my secret self” と呼ばれるこの Leggatt は, 共感を覚える「理想的人物」とみなすにはあまりにもかけ離れたような人物—殺人者にして逃亡者—として示されてくるため, double としての Leggatt をめぐっては従来, 主人公の精神的な理想としての＜双子＞の片方としてよりもむしろ, 主人公の内面に隠された “potential criminality”<sup>2)</sup> あるいは “guilt”<sup>3)</sup> といった「暗い」衝動, 心理傾向の＜分身＞として縮小化した観方をされることが少なくないのである<sup>4)</sup>。確かに Leggatt の描かれ方には彼を非実在的に印象付けるような部分があるのみならず, その言動に社会倫理に反するところがあることは否定できない。ことに殺人を犯し, かつはその重みを最大に重視せず, 逃亡し, 社会規範や法を軽視する点では明らかにそうなのである。しかしながら, この作品における Leggatt の役割がもしそうした意味での＜悪＞だけのものとして考えるとしたら, Leggatt という一個の存在に込められた微妙かつ大切な主張を見落すこととなるのではないか<sup>5)</sup>。

実際, 今一度この作品を読み返してみるならば, Leggatt をめぐる物語とは単純な判断では割り切れない心理的, 倫理的に複雑な状況が積み重なってゆくものであり, そのような状況において Leggatt は, 真正面から立ち向かうことをやめてしまう彼の周囲の人々のそれとはいわば対照的な精神として, その意味を発揮するように思われるのである。小論は以上の見地に立って Leggatt の物語を中心にその精神的価値に迫るものである。そのことは, 取りも直さず, 主人公が Leggatt に対して抱き続けた一点の苛責の驕もない共感の理由を明らかにすることになるが, だとすればそれは, 主人公自身の物語としての全体の解釈に役立つばかりでなく, 大きくは Conrad が他の作品を通して探求している現代の＜自我＞の問題への糸口を与えてくれるだろうと思われるからである。

[ ii ]

Leggatt の物語は, 闇の海を一人泳ぎ渡って来た彼を主人公が発見し乗船するよう促した直

後から、いわばその時点に至るまでの事情の告白を中心として始まる。物語は Leggatt の行為と彼をめぐる条件の変化に沿ってほぼ3つに分けることができる。Leggatt の殺人が起こるまで、殺人事件、逃亡、である。Leggatt の精神的な価値を考える際、まず注意したいのは第一の部分である。時間的には第二の部分と連続して起きているのであるが、看過できないように思われる。

まず Leggatt の殺人が起こるまでの経緯を明らかにしてみよう。事件は Leggatt が一等航海士を務める Sephora 号が南緯39度、すなわち喜望峰沖を通過中に起きるのであるが、ここが外洋航路の難所であることは周知のとおりである。石炭を満載した「喫水の深い」Sephora 号は大嵐に見舞われ「次々に帆を吹き飛ばされ」絶体絶命の危機に「一週間以上もの間」曝されていたのであった。外洋航海の経験の長い Sephora 号船長以下年行の船員たちにとってもそれは未聞の恐るべき難況だったらしく、長期に及ぶ不眠不休の戦いの疲労と底しれぬ自然の猛威の前についに全く判断不能になってしまうのである。Sephora 号船長は main topsail が飛ばされた時最後の望みが断たれたと思いこんでしまい、かたわらで命令を待つ Leggatt に、何の指示らしいことは「一言も発せず」(171)「うわ言をいって」(148) 立ちつくす。差し迫る危機の真っ最中に加わった船長の茫然自失を目の当たりにして、あまりのことに「気も狂わんばかりに」なった Leggatt はしかし＜無我夢中＞で船長の代りに＜全てを引き取り＞(171-2)、この場合残された取り得る最後の手段を reefed foresail を張ることと見定め、力を尽くす決意を固めるのである。

その人間の持っている本当の精神力は危機に臨んで初めてわかるというのが、緊急の事態にしかも不測のことが加わった異常な状況に即応した Leggatt には、Sephora 号船長と対照的な、ある優れた精神が存在することが確実であろう。Conrad は *Lord Jim* の Marlow を通して難況に於けるそうした二様の人間のありように触れて次のように述べている。

He [Jim] might have been resigned to die, but I suspect he wanted to die without added terrors, quickly, in a sort of peaceful trance. A certain readiness to perish is not so very rare, but it is seldom that you meet men whose souls, steeled in the impenetrable armour of resolution, are ready to fight a losing battle to the last; the desire of peace waxes stronger as hope declines, till at last it conquers the very desire of life. Which of us here has not observed this, or maybe experienced something of that feeling in his own person—this extreme weariness of emotions, the vanity of effort, the yearning for rest?<sup>6)</sup>

恐怖で萎縮し、平安と見粉った麻痺のうちに「死ぬことを欲した」Jim についての説明の部分は「何をやっても駄目で、望みが尽きるのがわかっていた」ばかりに「敢えて命令をしなかった」(“I hardly dared give the order. It seemed impossible that we should touch

anything without losing it.” (165)) という Sephora 号船長にそのままあてはまるものだろう。かたや Leggatt は絶望的な状況に陥りながら彼個人の判断と意志力を頼りに最期まで戦うことをやめない。

### [iii]

最期まで意志することをやめず何物にもそれを譲り渡さぬ強靱な自我、あるいはそのような精神を Marlow は “steeled soul” と呼んでいるが、それこそは主人公が会った Leggatt に直観した精神であり (144), Leggatt が体現している精神の基調をなすものである。しかしながらこの気質が英雄的に示されるのは束の間で、Leggatt の物語はいわば上述の優れた性質のロマン的な部分を一切剥奪する形で進行する。というのは Leggatt はその直後 Sephora 号船長の〈双子〉とおぼしき船員の頑迷な反抗に阻まれ、揉み合いになった挙げ句、彼を死に至らしめてしまうからである。

解釈者によってはこの時彼らに覆い被さってきた大波の不運を強調したり、正当防衛だったとして<sup>7)</sup>、彼にできるだけ殺人の罪を認めようとししないものもある。しかしそのように解釈してしまうことは、Leggatt の行為を単に一等航海士としての社会的な立場からのみ考え、非常事態に取るべき強硬手段として致し方なかったとする解釈と同様、この作品の倫理的心理的視点の複雑性を無視するものとなろう。Leggatt は相手を死に至らしめた時渾身の力をもって手にかけてことは打ち消しがたい事実であるからだ (148)。だからといって Leggatt は残忍で暴力的な人間であったわけではない。Leggatt はこの後はいかなる場合においても己れが逃亡したために他の船員が死ぬような可能性を招く事態は極力避けていることを考えるならば、確かに無意味な憎しみにかられた人々を “Miserable devils that have no business to live” (146) と罵倒しているが、心底から〈生きている価値のない〉人間として殺しても当然などと思っていたわけではなさそうである。それではどのような事態でことは起きたのであろうか。実際、主人公は、Leggatt は “fit of temper” (146) に陥っていたと推測しているが、それは案外 Leggatt のこの時点の事情を考える際の重要な情報ではないか。とはいっても上に見たように人より自制力も冷静さもある Leggatt であるから、単純な逆上ではないだろう。それはむしろ、長期に渡る緊張からくる疲労と、またしても重なった異常な事態に一瞬起こった微妙な錯乱ではなかったか。

関連して思い出したいのは上述の *Lord Jim* における引用の後半の部分である。Leggatt の必死の命令に対し呪詛でこたえ、あまつさえ、彼に殴られて掴みかかってきたこの船員は、全てを放棄する “peaceful trance” を Leggatt にかき乱されたことを怒った、まさに逆上した暴徒と考えられる。しかしここで忘れてはならないのは、実は steeled heart の持主 Leggatt もまた、 “extreme weariness of emotions, the vanity of effort, the yearning for rest” を感じないわけではないことである。彼とても〈見るたびに白髪になってしまいそうな大荒れの海〉 (148) を前に恐怖し自分に負けてしまいそうになる心と戦う人であるのだ。とすれば、この時彼にはこの反抗的暴徒が、全てを放棄するという偽物の安寧、紛いの平和を求める自分自身の

惑いの心そのものに見えたとは考えられないであろうか。だからこそ彼は渾身の力でこの恐るべき自分の〈分身〉を縊り殺さねばならなかった——。Leggatt の殺人の次第に以上のような一瞬の錯乱を読み込むならば、殺人という暴力の中にさえ彼の一貫する精神を見ることは不可能でない。そのような Leggatt において示されてくる精神とは、もはやむしろ超人的な強い自我ではないが、偽物の安寧に走らず、飽くまでも〈正しく〉あり続けようとするひたすらな精神とも読めてくる。

Leggatt は不完全であるがゆえに〈悪〉を為した。しかし自分の義に対しこの上もなく忠実で、一貫するのである。彼はその意味で ambivalent であるが、そのことがその精神的価値とともにより際立たせられてくるのは、彼の船の救助義務の敢行が、周囲の人々によって全面的に否定されるという次なる社会的倫理的異常事態の中である。

#### [iv]

さて大波がひいて殺人の事実があらわになるや、実に皮肉なことに、つい先程までは恐怖にすみあがっていた人々はたちまち活気を取り戻すこととなる。絶望と放棄の安らかさに身を委ねようとしていた人々は、現実の死、そして殺人を見るやたちまち殺人者に対する怒りにおいて復活し、猛然と Leggatt 告発を行うのである。Sephora 号船長は今や嵐に立ち向かうべく防水服を着込んだすがたで、大波による失神から目覚めた Leggatt の前に立って一方的に罪状とその処罰を宣告する。("Mr. Leggatt, you have killed a man. You can act no longer as chief mate of this ship. (148)") Leggatt は、船の危急存亡の時にあたって船長に代って正常な判断を行い、必死の努力で船を救おうとした。にもかかわらず、彼のこの点に関する一切の功績は、ことの発端である船長の責任放棄とともに全く無視され、殺人という事実のみが大きくクローズアップされてしまうのである。さらに彼は監禁されることによって、殺人者としての烙印("brand of Cain" (153))を押されてしまい、ますますことの真相から引き離されてしまう。おそらくこのような船長らの反応に Leggatt は驚愕と深い失望を感じただろうことは否定できない(Am I a murdering brute? (152))。

ところで D. M. Daleski は、Leggatt が「胡散臭い」人物としてみられても仕方のない理由は、犯した過失に対しての社会的責任という点で公判にでる義務があると思われるにもかかわらず、敢えてその必要性を認めないことと指摘している。Patna 号から逃げ出した罪に関して公判を受けようとする Jim と対照的に、

What can they know whether I am guilty or not—or of what I am guilty, either? That's my affair. (180)

と述べ、自分の罪を自分で決定しようとする Leggatt に「傲慢」を認めるのである<sup>8)</sup>。しかし海上で働く者達でさえこのように難局の程度認識に欠け、殺人事件の一筋縄ではゆかない真相を見極めようとせず、ただ法の機械的適用に固執するものならば、一体陸の人々に何が判ろう？ Leggatt が社会をそうしたものとして(いささか早急であるにせよ)絶望視したと考えること

は不可能ではない。Leggatt は、社会的な判定を待って自分の正当性をみすみす潰されてしまうよりは逃亡することをこの場合自らに報いる唯一の方法として選んだのではないか<sup>9)</sup>。

また Leggatt はそのはじめから、社会の判断や法の価値を全く軽んじていたのではないことは注意してよい。Leggatt が Sephora 号船長に単独の会見を申し込み、逃亡の便宜を図ってくれるよう願った行為は一見尊大に見えるが、別の観方をすれば、船長の「法の代表者」(153)である社会的立場を考慮するもののようにも取れるからである。即ち法を遵守すべき立場では過失を犯した彼を処罰せねばならないとしても、個人的には船乗りとしての彼の行動の価値を理解してくれないだろうかと考えたのではないか。しかし Sephora 号船長はその名も Archbold という癒しがたい鉄面皮の船長であって、良心を持ち合わせた Vere 船長というわけには行かず、かたやこの賢い Budd は、自分の正当性を知っているのはただ己のみであり、それを貫く手段は船長のような人々の構成する社会には求められないことをさらに痛切に思い知らされることとなるのである。

Leggatt の社会的制裁からの逃亡は、このように、説明も弁解も理解されないことが見通しとしてあるなかで自らに対してその正義を証しして行く道であった<sup>10)</sup>。Leggatt は自ら過ちがあるとしてもそのために難事に当たった自分の態度の正しさや意志の正当性を犠牲とすることを潔しとしないのである。Leggatt の示す精神は Jim が公判をうける際に示す誠実さとは趣を全く異とするものである。Jim の誠実は、ある意味で社会とその制度に依存するものであるのに対して Leggatt の誠実は、ただ自らが自らに対して持つ誠実であるからだ。

ところで何故船長以下 Sephora 号の人々がことの真実にこれほど無神経になりえるのかは興味深い問題である。ここで考えておきたいことは、Conrad がこの短編を書く前後を通して取り組んでいた *Under Western Eyes* における Razmov の裏切りである。Conrad はそこで Rasmov が助けを求めてきた Haldin を裏切る心理の過程をつぶさに検討しているが、革命を否定する帝国主義の〈圧倒的な論理〉<sup>11)</sup>を自らの正義のよりどころとし、本当の良心の叫びを封殺してしまった Rasmov は、Conrad にとって〈時代を覆っている〉一つのとても微妙だが深刻な〈精神的状況〉<sup>12)</sup>の一典型であった。Conrad はそうした Razmov のおのが見つめるべき真実から目をそらし自己をごまかすところに、癒しがたい現代の病としての自我の内なる弱体化をみてそれを“cynicism”と呼んでいるのであるが、そのことを下敷にしてみると、まさに命拾いした原因を〈神の恩寵〉にすりかえる一方、殺人者に対して〈法の正義〉を形式的にふりかざし (165) 己が正義のよりどころとして Leggatt に正当なだけの真実を認めようとしない Sephora 号船長は、まさに期せずして〈自分で自分を卑しめる〉ひそかな自己欺瞞 (“the secret readiness to abase [himself] in suffering”)<sup>13)</sup>、すなわち“cynicism”に陥っている人物といえるのである。

この作品のなかでこうした精神は一人 Sephora 号船長のみが表しているのではないことはいうまでもない。Sephora 号の小さな船社会は言わば全体としてそうした自我が内において弱体化した社会ではなかったか。というのはそのはじめから Leggatt は Sephora 号船長以下船員たちにまるで“poison”のように〈嫌われていた〉とあるが、Leggatt に限らずこの船では〈

どんな一等航海士でも一航海以上長続きはしなかった〉のであり、船長もまた人々を〈恐れていた〉のである（152）。どうやら船の人間関係は互いに慣習で監視し縛りあい、彼らのコードから逸脱する者を排除することによって秩序を維持していたらしい閉鎖的なものであることが判るのである。そのような社会であるゆえに不測の事態に誰も目覚めた反応ができなかったのであり、一方 Leggatt が殺人を犯したとなるや、たちまち活気づくのである。かれらは、いわば Leggatt をスケープゴートにしたといってもよいかもしれない。彼らの自我が依って立つところのコードが保たれ、彼らの自我が安んじるための異者の排除、あるいは自らがなりたくともなりきれないものに対するルサンチマンの噴出。Leggatt に対する彼らの非道な行動が、かように己が自我の空虚さを埋め合わせるための虚しい行動であったとするならば、彼の物語の意味が新たな光を帯びて見えてくる。すなわち Leggatt の物語は、生死の危機のみならず、精神上、倫理上の危機において、生きた自我であり続け、自らを救済できる自我のあり方とは何かということを彼と彼の周囲の人々との対照を通して示そうとする物語なのである。

#### [ v ]

以上のように見るならば Leggatt は、Conrad が例えば、*Lord Jim* や *Under Western Eyes* において探求してきた時代と自我の内なる弱体化の問題に対して与える間接的な解答の一つになっていると考えることは、それほど的確はあらずであるまい。Leggatt はいかなる慣習、法、規範にも盲従せず自ら判断する力と、自らの正しさ、己が〈義〉を持つ、自主という自由と威厳を内包する自我である。対して Sephora 号船長以下船員たちは既成の枠の内ではしか判断することができぬ、慣習、法、規範、に内なる支えを譲り渡した、無力で空虚な自我である。Leggatt の物語の行為はたしかに秩序維持を最大の目的とする慣習的正義感からはあってはならない逸脱を含むものとはなった。しかし自ら正当であることを選び自らに隠れなき自分であり続けようとする精神とは実はあらゆる倫理の生まれ出ずる基盤ではなかったか。

Leggatt が裸身となって海を一人泳ぎ進もうとするその姿に主人公の船長が感じたものはそうした Leggatt の自主と自律の精神でもあった<sup>(3)</sup>。Leggatt の物語は、その精神が皮肉な偏向を余儀なくされて展開されるものであるが、直観に優れ、目覚めた自我を保ち、自発的に正しくありたいと心中深く欲する主人公には彼の精神の重要性が常に見えていたに違いない。彼は、Leggatt の精神をそれが必然的に伴う問題と共に引き継いで、自らの物語のなかで慎重に実現してゆくのである。

#### 注)

- (1) Joseph Conrad, *"Heart of Darkness" and "The Secret Sharer"* (Bantam Books). 以下テキストはこの版により、引用、言及の箇所はページ数 (138) の要領で本文中に示す。
- (2) Albert J. Guerard, "The Journey Within", *Conrad the Novelist* (Cambridge : Harvard UP, 1958), pp. 1-59.
- (3) Douglas Hewitt, "The Secret Sharer", *Joseph Conrad : A Critical Symposium* (Michigan State U., 1960), pp. 289-95.



- (4) H. M. Daleski も “The Secret Sharer” *Joseph Conrad, The Way of Dispossession* (Holmes & Meier, 1976) において Leggatt を主人公の心理的 double として見ている。Daleski は Leggatt の他者としての実在を重視しており、その点で上記二者とは少々異なる扱いとなっている。しかし彼に精神的・倫理的価値を認めない点で同様である。
- (5) Leggatt を精神的な双子として捉えた批評に F. R. Leavis “The Secret Sharer”, *Anna Karenina and Other Essays* (Chatto & Windus, 1967) がある。拙論もこの批評に大きな示唆を得ているが、Leggatt の中心的行為をめぐる解釈は心理的な面で詳細ではない。
- (6) Joseph Conrad, *Lord Jim* (Penguin Books) Chap. 7, p. 71.
- (7) Franklin Walker, “Introduction”, “Heart of Darkness” and “The Secret Sharer”, p. viii.
- (8) D. M. Daleski, p. 178.
- (9) この点を例えばこの発言の直前において Leggatt が口にしていう家族への言及 “My father’s a parson in Norfolk.” をもとに彼の階級的プライドに求める議論も少なくない。がそれではやはり物語の本質を見落すのではないか。というのは彼が処罰を恐れるのではなく、公判においてただ衆目にさらされる屈辱を忌避するために＜その必要性を認めない＞のだとすれば *Lord Jim* における Brierly 船長と同じ人物になってしまうからである。彼は階級制度に自らの正義や存在理由を求めるような人物ではない。少なくとも彼は身に降り掛かった体験を通してそうした慣習的に規定される空虚な自我は捨ててしまったように思われる。
- (10) 闇の海へ逃亡することは、「地の果てに追い払われ」ることであり、自らが選んだ Cain の〈過失〉に対する処罰でもあった。
- (11) Joseph Conrad, *Under Western Eyes* (Penguin Books), “Razmov stood on the point of conversion. He was fascinated by its approach, by its overpowering logic. For a train of thought is never false.” chap. 2, p. 79.
- (12) *ibid.*, chap. 3, p. 105.
- (13) 闇の海を一人泳ぎ続ける Leggatt が衣服を脱ぎ捨てたということは単に彼が自らを一旦社会的に葬ったことを象徴的に示すのみならず、自らが自らを選ぶ自発性、独立性が実に生身に近い、個体に深く根ざすものであることを暗示しているように思われる。

(原稿受理 1994年5月2日)